に築かれている (図1)。

高田川の西に所在する馬見丘陵周

高田川と葛城川にはさまれた低地部

馬見丘陵から約一㎞東にあり、

三〇mの前方後円墳である。当古墳 郡広陵町弁財天に所在する墳丘長約

長三二mの前方後円墳であるまるこ

古墳が所在しており、

発掘調査に

えた東側には古墳時代後期の墳丘

当古墳から南東へ約一

kщ

葛城川を



165

橿奈

原考古院

□学研究所 立

二〇二二年三月二

一日発行

奈良県橿原市畝傍町一番地

第 編集者

髙

木

清

生

櫛 玉 媛神社古墳の埴 輪

陵

東 影

悠

出土している。出土している。 櫛玉媛神社古墳は、 墳丘主軸が東

青

櫛玉媛神社古墳の概要

玉媛神社古墳は、

奈良県北葛城

時代中期以降あるいは後期に築かれ あるものの、 当古墳は埋葬施設の構造等も不明で ものの、 が出土したとの記録は知られてい る。これまで、 濠と外堤が比較的良好に残存してい から前方部、またそれを取り巻く周 社の禁足地となっており、 櫛玉比女命神社の拝殿、 に向ける。後円部上に式内社である 西を向き、後円部を東、 たと想定されてきた。 本殿が位置している。 その詳細は不明であった。 その立地などから古墳 当古墳から円筒埴輪 前方部は同神 前方部上に 前方部を西 くびれ部 た

<u></u> km

の地点にある箸尾遺跡において

葛城川の間には、

当古墳から北へ約

墳群が築造された。一方、

高田川と

けて前方後円墳を主体とする馬見古

辺には、

古墳時代前期から中期にか

墳丘長四〇mの前方後円墳を中心に

数基の方墳などが点在するのみであ

古墳はあまり分布していない。

Ę 櫛玉媛神社古墳の埴輪

令和三年二月、 櫛玉比女命神社の

> 理及び記録の作成を行うこととした。 慮して博物館で一時的に預かり、 あったことから、 れまで円筒埴輪が出土したとの記録 が当研究所附属博物館に入った。 地 中川行夫宮司から、 が知られたもののその詳細は不明で 述したように櫛玉媛神社古墳ではこ から埴輪等が発見されたとの連絡 資料の重要性を考 倒木に伴い禁足 整 前

<u></u>cm cm 能性が高い。その場合、 みられ、 2は接合しないが、 円筒埴輪 面の調整の類似などから同一個体と メパターンの一致、 の普通円筒埴輪が確認できた。 下に資料の詳細を報告する。 ・六㎝となる。 である。 口縁部径二六・四四、 四条突帯五段構成となる可 **図** 2 少なくとも二個体 3は底部径一一・ 突帯の形状や器 外面調整のハケ 器高約五八 底部径 1 と

テハ 1~3の調整はいずれも外面がタ ケ、 内面はナデである。 突帯は

次 字陀の古墳時代前期鉄製武器の 櫛玉媛神社古墳の埴.

東

影

悠

1

水

野

敏

典

5

附属博物館関連展示案内 平尾東六・七号墳

目

編 集 8

性がある。1・2は須恵質、3は土板オサエの前にケズリを施した可能 サエであり、 師質を呈する。 動いた痕跡が認められることから、 断続ナデ技法Aによって貼り付 されたものである。 れ ている。2・3の底部調整は 外面には僅かに砂粒 いずれも窖窯で焼 ij 0

墳の前方部墳頂にあたるという。 なお、当資料の発見位置は前方後円 以 れる。 どの可能性が考えられる。 埴輪の破風あるいは馬形埴輪の鞍な 形埴輪の盾部などの可能性がある。 その剝離痕跡が側片に沿って認めら られていたとみられる粘土の一部と 形象埴輪片である。 ある。調整は外面・内面ともにナデ とみられる。下端の径は八・○□で 6 不明形象埴輪 が施されている。 動物埴輪 は側片が円弧を描いており、 靱形埴輪の鰭部あるいは大刀 ② 2 **図** 2 4は動物埴 表面に貼り付け 5は、 鰭 |輪の脚 家形 状の

あることから、 衣の裾部と台部もそれぞれ一 人物埴輪 (図 3) 少なくとも二個体の 頭部が一 個 一個体分 体、 上

箸尾遺跡 方墳 (SX108) 45 106 ·107 283 o110 葛城川 高田川 少池上古墳 馬見古墳群中央群 55 乙女山古墳 櫛玉媛神社古墳 本松古墳 倉塚古墳 巣山古墳 まるこ山古墳 183 1km

図1 櫛玉媛神社古墳の位置(「奈良県遺跡地図Web」を改変)

部の垂髪になるとみられる。 とないものの9・10はともに7の垂 とないものの9・10はともに7の垂 がほぼ完形で残存している。接合は がほぼ完形で残存している。接合は

認められ、何らかの別パーツが取り一切離痕跡とそれに取り付く粘土塊がである。左胸部分に弧を描く粘土のである。

体となる可能性が高い。やや甘いものの、7と接合し同一個付けられていたとみられる。接点が

は、同一個体の可能性があるものの、粘土紐によって表現される。13・14は、胴から腰にかけての破片であり、ともに腰帯がかけての破片であり、ともに腰帯がかけての破片であり、ともに腰帯がかけての破片であり、 13~15に確認さ

半から鼻にかけてが残存している。 され 腰帯の垂下を粘土紐によって表現し した。 接合しないことから別図として表現 ている。15は台部とみられる。 付けられていた可能性がある。14は、 痕があり、 12 は、 た顔部の下半である。 13 は、 入れ墨を表現した線刻の施 何らかの別パーツが取り 腰帯上部に指による圧 両目の下

> おり、 が、 埴輪がV期のものであることと、当古墳から出土した埴輪は、四 作されたものである。 紐をもちいた突帯が貼り付けられて れたハケメパターンと一致するも 紐によって表現している。 の裾部分であり、 16・18の台部はともに最下端に粘土 台部であり、外面調整はナデである。 18は同一個体の可能性がある。 11は指の可能性がある。 18で確認されたことから、 形象基部倒立技法によって製 腰帯の垂下を粘 17は上衣 17 に 施さ 円筒 16 は 形

認められた。 認められた。

一、櫛玉媛神社の土器

当古墳は禁足地となっていることか ・ 製作時期等の詳細は不明である。 め、製作時期等の詳細は不明である。 め、製作時期等の詳細は不明である。

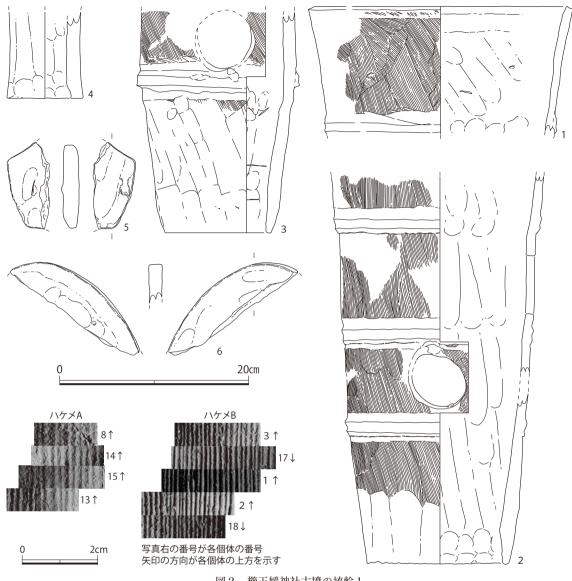


図2 櫛玉媛神社古墳の埴輪1 (実測図:S=1/4、ハケメパターン:S=1/1)

古墳との共通点は認められない。

Bが認められるものが多く、 櫛玉媛 筒埴輪は最下段突帯に断続ナデ技法

などの形象埴輪が出土している。 輪のほか、家形、人物、蓋形、 られる。まるこ山古墳では、円筒埴 まるこ山古墳(広陵町広瀬)が挙げ

円

靱形

神社古墳の円筒埴輪とは特徴が異な

形象埴輪も現状では櫛玉媛神

期末頃の円筒埴輪のほか、家形、

人 中 0)

鶏形などの形象埴輪が出土して

方墳

(SX一〇八)から古墳時代

陵町萱野)では一辺の長さ一五m

やや時期が遡るが、箸尾遺跡

のは岩室池古墳(天理市岩室町) 古墳の人物埴輪と最もよく類似する 墳とは特徴が異なる。 奈良盆地内において、 櫛玉媛神社 出

貼り付けられるなど、櫛玉媛神社古られず、突帯はユビオサエによって

がら、円筒埴輪には底部調整が認

る人物埴輪が認められる。

しかしな

れ墨を表現したとみられる線刻のあ

特徴はやや異なるが、

顔に入

櫛玉媛神社古墳周辺の埴輪

と考えられる。

ら、そこでの祭祀に用いられたも

後期の埴輪が出土した古墳としては、 櫛玉媛神社古墳の近傍で古墳時代

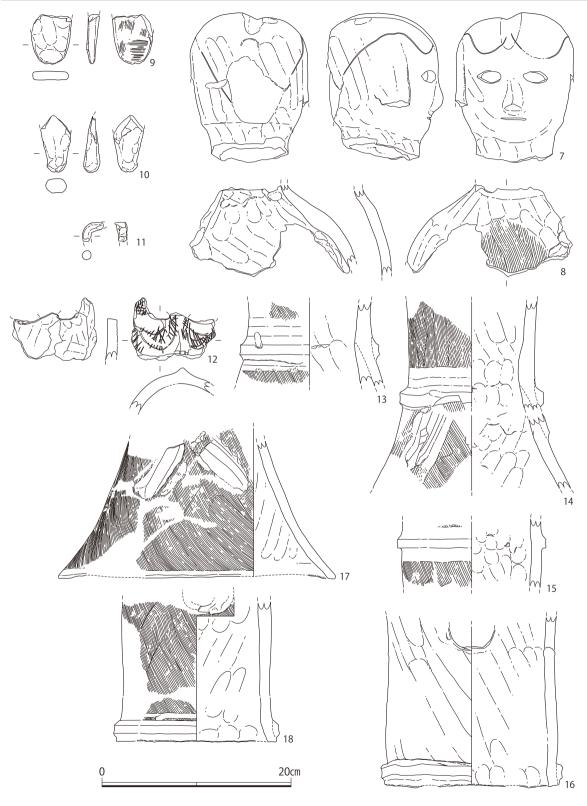


図3 櫛玉媛神社古墳の埴輪2 (S=1/4)

凹み、 共通性が高い。 は小孔があり、 らに岩室池古墳の人物埴輪の左胸に 目や鼻の表現も類似する。 櫛玉媛神社古墳例と z

3

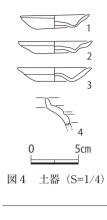
る。櫛玉媛神社古墳の埴輪については複数の系統があると指摘されてい は、 討していく必要がある。 奈良盆地の古墳時代後期の埴輪に 製作技術の系譜を今後さらに検

成による成果の一部を含む。 ○三および二○H○一三六三の助 櫛玉比女命神社中川行夫宮司には、 本稿はJSPS科研費二〇K〇一

いたします。 両氏の協力を得ました。記して感謝 図については、 きました。また、資料の実測及び製 資料の公表についてご快諾をいただ 山口等悟・宮田稔子

註

1 櫛玉比女命神社古墳と呼称される 跡地図Web」にもとづき櫛玉媛 場合もある。 本稿では「奈良県遺



11

前掲註5文献など

土例である。頭部の線刻と頭頂部

0

- $\widehat{2}$ 広陵町教育委員会二○○七 -第二次発掘調査報告--|
- 広陵町史編集委員会一九六五『広 陵町教育委員会一九八九『広陵町 遺跡分布調査概報 陵町史』 一〇〇一 『広陵町史本文編』 /広陵町史編集委員会編 /広

一、はじめに

センター紀要一九九一』 法」の再評価」『奈良市埋蔵文化財 中島和彦一九九二「「断続ナデ技

 $\widehat{4}$

生産からみた「部民制」の実証的 覚二〇二一 『六世紀の埴輪

5

東影 —」『待兼山考古学論集Ⅱ 作技術―形象基部倒立技法の研究 悠二〇一〇「形象埴輪の製

6

- 7 川西宏幸一九七八「円筒埴輪総論 『考古学雑誌』 六四-二
- 8 前掲註4文献
- 9 中井一夫・松田真一 一九八二 「広 年度(第二分冊)』奈良県立橿原考 報』『奈良県遺跡調査概報一九八〇 陵町沢・萱野箸尾遺跡発掘調査概 古学研究所
- 10 藤井幸司二〇〇三「円筒埴輪製作 文化財研究集会 技術の復元的研究」『第五 埴輪 一回埋蔵

神社古墳と表記する

宇陀の古墳時代前期鉄製武器

様相

平尾東六·七号墳

水

野

敏

典

『まる

重要な資料を確認したので、 の意義について考えてみたい。 活用と保存処理に向けて報告し、

二、平尾東古墳群

点

鉄鏃一点が出土したが

(図3)、

武器が副葬されるが、その生産・供 状墓が築造される。その一部に鉄製 の点検時に、古墳時代前期を考える 給状況は不明である。研究所収蔵庫 古墳時代前期にかけて多数の方形台 宇陀地域には弥生時代終末期から 本古墳群は、一九八四年に橿原考 一今後の そ と鉄鏃二点が、七号墳からは、 は、これに重複するため破壊された である。埋葬施設は木棺直葬であり、 墳は「コ」の字状の溝に区画された る古墳群である (図1・2)。 た。所在地は宇陀市大宇陀平尾で、 第一主体部に伴うとみられる剣一点 概報では、六号墳の第二主体部から 一辺約一二mの台状墓で、 六基と前期の方形台状墓二基からな する古墳時代中期末頃の木棺直葬墳 宇陀川を挟んで東岸の尾根上に位置 段低い位置の一辺一三mの台状墓 六号墳は

七号





平尾東古墳群分布図 (註1文献掲載図を改変)

報告された。 撹乱により本来の副葬状況にないと

三、出土鉄器 六号墳

(図 4

器や鉄器が出土している。 ンチ拡張区は北側尾根下に位置し ンチ拡張区の鉄鏃二点であり、 居址出土の鉄鏃一点、 墳の鉄剣一点のほか、 の記載と一部異なる。なお、三トレ 分剣一点、 現在保管されているの 弥生時代の溝が検出され、 鉄鏃一 点 そして三トレ 七号墳下層住 鉇一点、 は、 六号墳 概報 七号 **図** 土

で幅をやや広げ、ややナデ関で、

茎部に目釘孔はなく、

織物が多重に

巻き付けられ、

柄に木製装具痕は確

錆歪むが全長四・三㎝、 2は片鎬造りの定角式

鏃身最大幅一・七

断面は隅丸

矢

鞘痕跡はなく、

抜き身とみられる。

三トレンチ拡張区 5は錆歪むが柳

たが、 判断 告する。 理作業による出土遺構解釈の変更と 実測図を確認したところ、 できなかった れており、 かった。鉄器番号は概報時に変更さ 出面よりも高い位置から出土し、近 れた状態で南小口東棺外から木棺検 跡内より五四以上浮いて、 墳 るほかは保管状況とほぼ合致し、整 チ拡張区出土の鉄鏃一点が増えてい ら折り曲げられた状態で出土してい くに鉇とみられる棒状鉄器が確認で の鉄鏃は南側小口付近の木棺底痕 調 「査原図にあたったところ、六号 七号墳の鉄剣は、 鉄鏃の出土位置は確認できな 調査原図と個体の照合は ・稿では保管状況を元に報 (図3)。 さらに遺物 北側棺外か 三トレン 鉄剣は折 七号墳 る。 cm は板状で尖る。 鏃身長二・六四、 保存処理後の重量は一三・六gであ 機質の柄が装着されたとみられる。 さ約○・三㎝の柄を持つ。 デ関の刃部をもち、 さ約一・七四、 刃部は錆で細部が確認でないが、 鉇とみられる。 柄痕跡をわずかに確認できる。 方形で、重量は五・○gである。 茎部は長さ一・六四で、 ㎝、鏃身最大厚○・五㎝に復元でき、 鉄鏃である。 認できない。

部長は九・八四と長い。刃部に木製 で六三・〇gである。刃部は関付近 は約○・五㎝である。重量は未処理 先端をわずかに欠損 最大刃部厚 九 cm、 茎 二四 ない。鉄身は薄手で刃部中央からU と長く、 量は八三・九gである。 字形に曲げられている。 刃部および茎部に付着物は確認でき 〇・四四の目釘孔一つを確認できる。 刃部はナデ関で茎部長は約九・五 cm 1と似る。 刃部厚約○・四㎝ 茎部中央に直径 未処理で重 である。

刃部残存長一五・一四、

した短剣である。

残存長

二四

1は、

3 は 鏃である。 る。 鏃身厚は約○・三四と薄い板状であ 鏃身長三・六四、最大幅一・八四、 る。 断面は厚く、鎬をもつ菱形とみられ 鏃身長三・七四、最大幅一・八四、 根ばさみ痕は確認できない。 保存処理後の重量は四・五gである。 三、四四、 七号墳下層の弥生住居址 7は短茎 る。6は圭頭式鉄鏃で全長四・五 みえない。現重量は一一・六gであ cmである。 錆で鎬は確認できないが、 最大厚約〇・六四、 葉式B1a類である。 矢柄痕跡は錆と補填した樹脂で 未処理で四・五gである。 厚さは約〇・三四と薄く 全長三・一㎝で、 茎部長は二・一 全長五・九四 最大幅 cm

全長は一二・七㎝で、

長

最大幅一・二四でナ

幅〇・七四、

厚

四 出土鉄器の意義と問題

付近で錆び方が変わっており、

有

刃部先端より五・〇

柄の端部

伴関係が不明で、 土器類が出土せず、 本古墳群の方形台状墓の年代は、 詳細な検討は難し 鉄器の厳密な共

復元すると全長約三三四、

刃部長約

は折り曲げられた鉄剣で、

収まるとみられる。 状墓群の年代は古墳時代前期前半に 短剣の存在から六・七号墳を含む台 定角式や柳葉式B1a類や長茎

cm

愛媛、 もち、 摘する「同形同大品」に類例を加え でも広島県石鎚山1号墳などの長茎 やや意味を変えそうである。 のとなることで地域的偏在の解釈 たが、本例が加わり、 辺に分布し、 品」は鍛造品としては高い規格性を る可能性をもつ 短剣と各部法量と酷似し、 セフ氏の分類の長茎短剣である。 六号墳の剣 (1) は、ライアン 広島、 特定工房の製品とみられる。 地域性が指摘されて 岡山県などの瀬戸 (図 5)。 大和を含むも 「同形同大 同氏の指 内 中

おり、 の折り曲げ鉄器の最も確実で古相 ことが確認できた。 多く知られる一種の破壊祭祀とみら 木棺直葬墳からの出土であり、 論の余地があった。 石室出土品があるが、 れ、それが奈良県の宇陀地域に及ぶ 折り曲げは古墳出現前後の西日 れる茎部の長い型式である。 Ŕ 類例は、桜井茶臼山古墳の竪穴式 七号墳の折り曲げられた鉄剣 北部九州から西日本に多くみら 副葬時の様相を留めるのか議 大和の前期前半 しかし、 撹乱を受けて 本例は 本に $\widehat{4}$

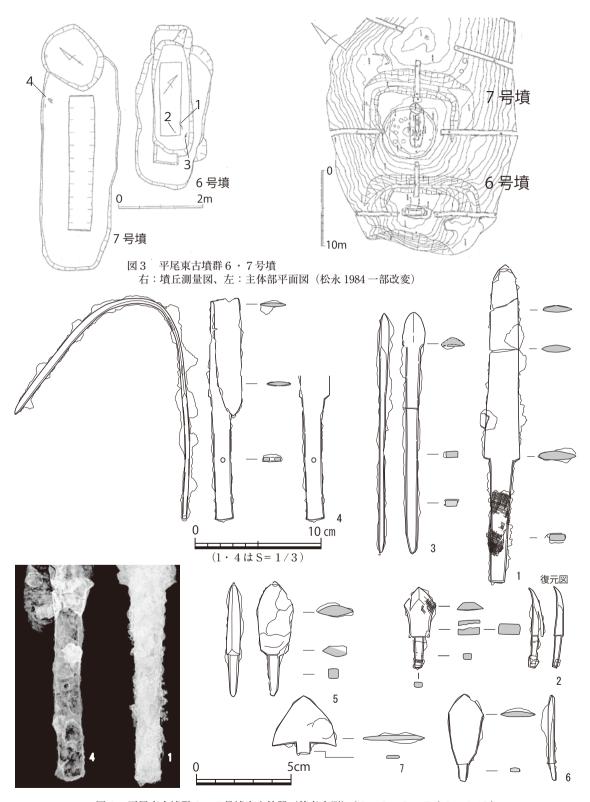


図 4 平尾東古墳群 $6 \cdot 7$ 号墳出土鉄器(筆者実測) $(2 \cdot 3 \cdot 5 \sim 7$ はS = 1/2)

例となる。

長茎の剣の生産・供給の重層的なあ 作の可能性を持つ。 で刃部先端が曲がり、中山大塚古墳 受け入れる同様の状況は、本古墳群 えてくれる。 者 る。少量でも宇陀地域の首長 稜系鉄鏃である定角式と、 ともに、大和の前期古墳に通有な有 土の定角式鉄鏃 (2) 大塚古墳と同型式の柳葉式A3類が 王山1号墓でもみられ、天理市中山 から北へ約一・五㎞離れた宇陀市大 布)を受ける関係にあったことを教 点出土している。なお、六号墳出 点ずつとはいえ出土したことにあ 「土例と類似し、 「⁷」 多い長茎の剣 本古墳群の特徴は、 が大和王権からの武器供給 有稜系鉄鏃一、二点を $\widehat{1}$ $\underbrace{4}$ 同一系譜の工房製 有稜系鉄鏃群と は、 西日本に類例 柳葉式が 片鎬造り の出土と (被葬 (配

ろう。 以外の型式とみられる。 前期前半頃の大和に通有の、 出土の圭頭式と同型式で、 で薄く、 ^方は引き続き、検討する必要があ また、 桜井市纒向遺跡や脇本遺跡 6の圭頭式鉄鏃は板状 古墳時代 有稜系

をあらためて確認できた。 みえる。しかし、 氏と小倉頌子氏の協力、 きる祭祀体系であったとわかる。 が、宇陀地域の方形台状墓を許容で 祀は、前方後円墳を主体に展開する 古墳時代前期の大和における古墳祭 からみれば、 後円墳とは異なる弥生的な葬送とも 巨大な墳丘と竪穴式石室を持つ前方 一八三八八および二〇K〇一〇八六 研究成果の一部であり、 簡素な方形台状墓は、一見すると 本研究は、JSPS科研費二一K 同一の基盤にのること 鉄製武器の供給網 ライアン 同時に、 土居紀子

て感謝いたします。

ジョセフ氏より御教授を得た。

記し

註

 $\widehat{1}$

- 度(第二分冊)』 奈良県立橿原考 松永博明一九八五「宇陀地方の 跡調查——大字陀町平尾東遺跡——」 古学研究所 『奈良県発掘調査概報一九八四年
- 現前後の副葬品構成と鉄鏃」『ホ 水野敏典二〇〇八「前方後円墳出 ケノ山古墳の研究』 奈良県立橿原

 $\widehat{2}$

- 3 墳出現期における刀剣類の生産と ライアン ジョセフ二〇一九 流通の二相」『日本考古学』第四 古
- $\frac{1}{4}$ ライアン ジョセフ二〇一七 第二一二号 古代学研究会 長
- 5 県宇陀郡榛原町大王山遺跡。 橿原考古学研究所一九七七 町教育委員会
- $\widehat{\underline{6}}$ 大塚古墳』奈良県教育委員会

「同形同大品」の長茎短剣との比較 3は註3文献掲載図を転載

号 水野敏典・川上洋一二〇一九「古 いての覚書き」『青陵』 墳時代前期の鉄器製作と砥石につ 奈良県立橿原考古学研究所 第一五八

- 日本考古学協会
- 茎短剣の成立過程」『古代学研究
- 橿原考古学研究所一九九六『中山 榛原 『奈良
- $\widehat{7}$ 註2文献に同じ。

田山一号墳

QZ/2

1770

1 奈良県平尾東 6 号墳 2広島県石鎚山1号墳

3 広島県才ヶ迫1号墳

図5

8

附属博物館展示案内

令和4年度春季特別展 リニューアルオープン記念

「八雲立つ出雲の至宝」

と歴史的に関係の深い島根県の優品 します。ぜひお越しください。 を集め、 再開館後初の特別展です。 奈良県の優品とともに紹 奈良県 介

会期:令和四年四月二 六月一九日 日 三日 土

後援:朝日新聞社 **共催**:島根県立古代出雲歴史博 物 館

会場:特別展示室、 研究講座・列品解説:四月 五月一五日、 六月一二日 瑞山 ホ 1 四 ル H ほ

主な展示品:

国宝 重要文化財】 遺跡)、 山古墳)、銀金銅装円頭大刀・鏡(岡 金銀装円頭大刀・馬具(上塩冶築 らけ谷横穴墓)、埴輪 飾り馬・家(平所遺跡)、金銅製冠・ 銅鐸・ 銅鐸 双龍環頭大刀(かわ 銅剣・ (加茂岩倉遺跡 銅矛 見返りの鹿 (荒神谷

【島根県指定文化財】 邪視文銅鐸 (伝 一号墳 出雲出土)、 瑪瑙勾玉ほか (上野

など約三○○点